

文学 雑 感

山 中 博 心

今、文学、文学研究は何処へ行おうとしているのか。とりわけ外国語を介してその国の文学に携わることは、実用的な言葉が大手を振っている中で、非常に困難になっている。本来人間が生きることに端を発し、生きる上でののびきならない問題と不即不離の関係にあった文学はそうした前提、すなわち生活から離れ、ただ商業ベースの中に惨めに置かれている。生きるリアリティーを喪失した者達は依り代を失って主観的な世界に生き甲斐を求める迷える仔羊に墮している。それがどれだけその時代の流れに沿った大勢であるとしても、それは単なる主観の集まりに過ぎず、決して客観性を保持していない。いわば生物学的な発達と社会的な人格形成が乖離いた状態にあり、その不均衡を自覚することも少ない。世界を統べるものが何なのかと、あらゆる学問を修めたあとに嘆くファウストは過去の遺物に過ぎないのか。

そうした現状を打破する手だてがあるとすれば原点に戻ることであろう。ゲーテの専門家ではないが、色々な意味で他の作家を取り扱う時にも言及せざるを得ないのがゲーテである。『ファウスト』『ヴィルヘルム・マイスター』『西東詩集』等々の中に人口に膾炙する言葉が多くあり、機会ある毎に引用するものである。こうしたゲーテの重要なことばが今でも生きてると再確認したのは、30年余前に出版された『ゲーテ読本』（潮出版）を再読したときである。その中からいくつかを借りてゲーテ文学、文学研究の問題に触れてみる。

昭和7年に書かれた三木清の『ゲーテに於ける自然と歴史』ではゲーテの歴史への姿勢を通してゲーテの生き方を鳥瞰している。彼によれば、ゲーテの歴史への不信は資料の「不純」さ、「意識的な捏造」、「判断が既に作られ」ていることから来るものであり、そうした歴史が「科学的であろうとする」ことに特に不信感を持っている。しかしゲーテは歴史に対する関係を積極的に打ち立てようとしている。ゲーテがそうした姿勢を取るのは「理論」ではなく「業績」に重きを置き、「外面」からではなく「内面」からの探求を旨とするからである。こうした傾向は歴史に対して親和的であったロマン主義の人間ではなく、「古典の人間として成熟するに従い」強くなり、イタリア旅行が「歴史」と「政治」に対する「決定的な離反」をもたらしたと説いている。それにも拘らずゲーテはロマン主義を包括するのではないかという仮説

を立てる三木は、ゲーテが「人間生活の自然状態」を描こうとしたからであり、それによって歴史に無関係であった自然汎神論者スピノザとはことなり「歴史への通路」を開いていた、と考えている。

そうした三木の歴史の見方は「現実的な歴史概念」は外面的のみならず「内面的」に「ある特殊な自然概念を含まなければならない」という考えから来るものである。現実の実在性をゲーテは直観によって捉えるのである。伝来されたものとしての歴史は「直接的な体現的な直観を供しない」故にゲーテには馴染まなかった。しかし直観的なゲーテは却って歴史に親和的になると三木は考える。思弁的思考が「統一」から出発するのに反し、ゲーテの思考は「多様」から出立する。つまり多様な「個々のもの」を丹念に観察することで普遍性に至ろうとする、換言すれば特殊のうちに普遍を見たのである。「観察」から「熟思」へ、「熟思」から「結合」へ進むのである。その背後には「事実的なもの」がすでに「理論」である、「現象自身が理説」であり、「普遍は特殊のうちにすでに現れている」というゲーテの世界観が横たわっている。三木はそれを歴史学における「テュプス (Typus)」と見なし、ゲーテの唱える「原現象」、つまり「規則や法則は言葉や仮説を通じて悟性に開示されるのではなく、いわば現象を通じて直観に現示される」という考えと重ねている。まさに経験に則して直観される「イデー」である。そうした直観から見れば、偶然を愛するノヴァーリスと違い、ゲーテは「必然性」が欠けているという理由で歴史から眼を背ける。それは「繰返すもの、恒常なもの、テュプスなもの」を問題にするのが歴史学である、というブルクハルトの考えとも位相をずらし、「特殊」を含む「人間生活の自然形態」に重きを置く。しかしてゲーテは「普遍的なもの、恒常なもの、自然なもの」を目指す故に「歴史的或は政治的事件」に興味を感じなかったのである。

自然は過去も未来も知ることはなく、「現在」のみが実在的であり、そこで我々は「偉大なもの、美しきもの、重要なもの」と出会うのである。それらは最初から「我々の内部に織り合わされ」、その出会いにおいて「永遠なるもの」が「現在的」なものとなる。その意味では過去への「追想」と未来への「憧憬」に心を奪われるロマン派には「現在の堅固な把握」が欠落している、と三木は

考える。ある意味、主観性に絡めとられるロマン派を尻目にゲーテはより深く客観的になっていく。ここにもゲーテの複合的な深さと厚みを感じることができる。それはゲーテが歴史を「外から」「理解」していたのではなく、歴史と密に関わるファウスト的「行為の立場」と見ていたからである。しかしここでも復路において歴史意識が浮上する。それが「歴史が喚び起こす感激」であり、「瞬間に集中されることによって自己を徹底する」という「矛盾した歴史意志」である。ゲーテは生を「直感的」「現在の」「生産的」と感じていた。まさに歴史は過去の出来事の記述ではなく、「特殊なものに於ける、普遍的なものの特異なものとの絶対的な無差別をもっての、絶対的なものの叙述は唯シュンボルののみ可能な」シェリング的 Mythos (神話) である、と三木は考える。原型的なもの、Mütter は概念的ではなく直感的なものとして現れる人間生活の自然形態である。かくしてイデーは経験の背後ではなく、「却て経験そのものうちに与えられている。」

自然は「生成」と「運動」を旨とし、「原現象」を元とし変態を重ね、個体的統一を図る。「在る」のではなく常に「成り」つつ変化の中で「不思議に自己自身を統一する」。人間と自然との間に内面的アナロジーをゲーテは見ている。その意味では生きることは「自己と周囲との関係を育てる」ことである。関係しつつ自己の独立性を失わない個である。そうした人間の展開は「収縮」と「伸張」、「呼気」と「吸気」のような分極性に支えられ、自然との類似性を示す。こうした自然の漸次的、連続的発展に信を置くゲーテは破壊的、不自然なものを退ける。つまり「自己の自然」に従い、「自己自身の中心及び自己自身の要求から出たもののみが、善いもの」である。自然は有機体に他ならず、社会も然りであり、上述のアナロジーが成立するのも有機体においてである。人間の教養の過程も一つの自然的な形成過程であり、ゲーテ自身は「自然研究者」ではなく「自然観照者」であり、客観と主観の出会いを問題にしたのである。

ゲーテにとって歴史概念には自然の要素が不可欠であり、矛盾において力を発揮する「デモーニッシュ」なものは「主として人間と最も不思議な関係を持ち」、偶然的なものでありながら、「必然的」なものである。個人的なものにも社会的なものにも顕現するデモーニッシュなものは歴史における「自然的なもの即ち運命的なもの」と三木は規定している。まさにゲーテの第1の「根源語」の意味である。内から限りなく発展し、しかも「厳密な限定」の下にある「デーモン」。この「外的運命」と「内的運命」を支配するのが第3の根源語「愛(エロス)」であり、第5の根源語「希望」が存在を完成へと導く、と三木は論を閉じる。

歴史に対するゲーテの関係をゲーテの自然観から意味

付けた三木清に対してよりゲーテの生き様、為人に焦点を当てているのが亀井勝一郎の『偉大なる快癒』(昭和26年)である。人間と無限の可能性に対する信仰は「神の肩に手をかけようとする」と同時に「神に対する深い信頼」という形で顕現する。それがファウストであり、能う限り生の快樂と苦悩を受容しようとする。人間の仕事が細分化され「過剰にして多忙なる観念」に縛られる戦後状況に比してファウストはあくまで「全人的」であろうとする。そうしたゲーテ的人間主義的天才を亀井は「自然」という言葉に置き換える。自然の中にゲーテが求めたもの、つまり過剰性と病性によって歪められないものを亀井はゲーテの中に求めている。まさに亀井に取ってゲーテは自然の権化である。

ギリシャ的「人間は万物の尺度である」と、キリスト教的「神は万物の尺度である」という全く異なる見方を融合し、「人の子に対する深い畏敬、基督を受難に導いた全課程」をゲーテはギリシャ的に愛した、と亀井は考える。ゲーテに人間への全き愛を見ている。努めること、迷うこと、救いに人間の人間たる根拠を見ることに亀井は一切を欲するファウストを見ている。「無際限な空想」、「人間への限りなき信頼」が必然的に「悲哀」を帯びる。『若きヴェルテル』を執筆するゲーテは基督を身近に感じていた、とあえて亀井は言う。そしてヴェルテルの深き苦悩を基督の「わが神、わが神、なんぞ我を見捨てたまひし」に重ねる。自分の限界に耐え、自分の盃を飲み干すという人間の運命の一見弱そうではあるが、そうした運命に敗北することで「世俗」を乗り越えるヴェルテルはまさにファウストに比することができる。それが「ギリシャ的静謐」であり、「感傷と感受性」に溺れない術である。ひとたび死を味わうことで生き抜く、という『至福なる憧憬』の「死して成れ」に通じる。

そうした激しい一面をもつゲーテも基本的には環境順応者であり、「自然的」であった、と考える亀井は変革しつつ順応するゲーテの目標をドイツ的なものからいかにしてギリシャ的なものに自己を「変様昂揚」させるか、と捉える。そうした困難を自己に課する「偉大なるヒューマニスト」は「偉大なるユートピスト」であり、その意味では「芸術品としての国家が」ゲーテの理想、夢であった。

「歓喜をも苦痛をもこの胸の内に積み、／この自我を即人生にまで拡大し／遂にはその人生なるものとひとしく、滅びて見む」、というファウストの胸の内には、多様な生活の中を貫く「一貫性」と、世界を統べるものと同心円上にある「自己統御」への憧憬がある。死を凝視しつつ「彼岸」ではなく「此岸」の無限を信ずるゲーテは「個」の滅びも「他」に変容し存続する、即ち「死とは生の変容である」と考えていたであろう。こうした自己と他者の敷居を越えることは広くは、「我々の眼の中に光も色もないとしたら、我々は外の世界を知覚できな

いであろう」という自然科学の色彩論の世界にまで敷衍される。そしてかれの生きる中心にあったのは「詩人たること」、即ち「独逸語で書くこと」であると亀井は説く。真の楽しみを「詩的瞑想と詩作」に見いだしていたゲーテは一個の独自なる人になるという目標を抱きながら、同時に「全人類を包括する概念」に達することを自分に課している。ここでもメビウスの帯のように矛盾、反転を抱えた運動として世界全体を眺観し、その中に色彩論も植物変態説を位置づけている。そうしたヒューマニスト、ユートピストとしてのゲーテは亀井の眼から見れば、人間の社会性を云々することによって「個」の空虚を辛うじて隠している徒と完全に袂を分かっている。徹底して個に固執することからしか「人類」も「人間」も「社会」も見えてくることはない。刻々と変化する自己の「肉体感情」と作品との間の「必然性」が全体を保証するものとなるのであろう。「己に忠実」ということは決して欺かぬ「自然への忠実」にはかならず、観念的過剰があらぬ空想と感傷を生む「ロマン主義的」心性に溺れることはなかった。自然を貫くふしぎな創造力、その秘密に驚嘆しつつ人間の限界を知ることになり、知ることによって人間の限界を超える。

「現実的なものが観念を賢明にし、精神的なものが恐らく行為を高尚にする」というヴァレリーの『ゲーテ論』の言葉を借りて、「奇蹟のごとき現象」としての「渴望」の源泉を精神的能力に見て取る。ゲーテは政治をも詩人性で貫こうとした。それが彼の不幸を招いたとしても、それこそが詩人性の宿命である「永遠の反逆性」である。その意味では自由は政治という外的制度によって与えられるものではなく、あくまでも「心奥の感情の自由」である。個人から出発するゲーテは政治における「平均化された人間」を最も嫌ったのである。政治的能力と詩人的能力を「タッソー」のごとく、対立のまま自己のうちに保存し、孤独な政治家であり続けたゲーテにとって、「党派」に属すことは自己の死を意味した。そうした状況の克服は「悪を欲しんとして善をなす」メフィストのように「虚無」と「機智」をもって対処したのであろう。こうした想いがファウストの最後の言葉「人智の最上の断案」に現れている。政治家と芸術家という相反する二つの魂が「永久に相克する相において理想国の夢を育むであろう」。また「精神力としてそうあらねばならぬに相違ない」と亀井は結論づけている。

片山敏彦の『ゲーテとリルケ — オルフォイス的』(昭和47年)では、ゲーテの読者は「自己の心に深く聴き入り」、「生活のリズムを正しく昂揚させる」というゲーテ文学の特性に触れられている。それは彼の詩が「総合的な比例均衡の豊かさ」と「直感力の大きさ」を持つことに帰することができる。より具体的に言えば「悲哀や失意をさえ深く協和音に変える美の力」である。人々

を酔わせながら、覚醒へと導き、「きびしい法則に支配されながら各瞬間に新しい謎」を我らの眼前に現出させてくれる。自然、母なる自然を崇め、「もっとも人間らしい人間でありながら、何か人間以上のものを予感させる」ゲーテは、「建設的に」物事の本質を「深く視」、私心を断って「全体的に観る」ことを旨とした。まさしく眼で視つつ心の眼で見えないものを観ている。そうした純粋な詩人の象徴はオルフォイスであり、歌を生命とし人間の理性の能動性を美的に表現しようとする。その意味では「無形のものを形づけようとする」ドイツの詩人ヘルダーリンはその一典型であり、「心のふるさとに捧げる頌歌」を目指した。モーツァルトやシューベルト同様、「けだかい甘美さ」「心を強まらせる甘美さ」「高い甘美さ」を糧とした。その流れを汲むリルケもまた「一見無用なるもの」に奉仕し、詩を功利的なものから遠ざけた。ストイックに修道士のように「孤独」に「純なる諸関係」に身を委ね、「美」に己を捧げることで美が自ずから顕現するようにした。片山の言葉を借りれば「美の客観主義」が始まるのである。美は「ものの内面をくぐる」ことでつかみ得る。その過程で主観的なものが純化されるのであろう。リルケの魂はふるえながら、「存在の欠陥の共生の体験」を耐え忍んで感傷への落下の危機を乗り越えている。

ゲーテのオルフォイス的な詩は「デーモン」である。三木清の所で出て来た「根源語」のひとつであり、「おんみは必然的にそう有らざるを得ぬ。おんみは自己から逃げることはできぬ」という状況の中でデーモンは超絶者と内在者を媒介する。個的存在を全体の中で見ること、対象への愛の中で自己を変容させ、「暗き孤客」とならぬため自己を炎と化すことで、本来暗きこの世を照らすのである。古代的世界とキリスト教的世界を融合しようとするが、それは概念によっては説明不可能なことであり、「体験の不可視的な蜜を聚める蜜蜂」であるオルフォイス的詩人にのみ可能なことである。それは「世界を己の心情の象徴として尊ぶ」ことでもある。詩人オルフォイスは死して微塵となって宇宙に散らばり音楽が奏でられる。死を受け入れることで死に打ち克ち、生命を讃歌するのである。

『ゲーテの“自然”』(昭和55年)のなかで宇佐美圭司は光(レーザー)と人間の関係を捉え、「物質的純粋さ」は「感覚的印象」でもあると説いている。そうした主観的感性が客観性を帯びるのは抽象的な思惟が普遍性を有する為である。自然のイメージは現在の私たちの環境の中で後退し続け、ゲーテが自然と呼んだものは人工的な所産の影のような存在になり、人工的なものが“自然”の全体性を奪い去り、人間の精神はばらばらな断片になった。こうした分散状況とは異なり、二つの者の混交／交感陶酔的感覚によって生まれ、自然の一部分の現

象の中に形而上学的な全体性を出現させるのである。「ブロッケン山の観察は自然の観察であると同時に神の内存在性」の説明である。自然と人間の調和した交感を決して「抽象作用の際限なき進行」を許さない。ゲーテの言う「基本現象」は「直接目によって確かめる現象」であり、そうした現象の彼方にまで抽象作用を押し進めることをゲーテは良しとしなかった。それは彼の「倫理的価値観」に因るものであり、近代科学が転げ落ちて行った価値の問題を置き去りにした抽象的分析とは位相を異にしている。それゆえゲーテにあっては「合理的分析というひとつの器官の為に、そのほかすべての器官を萎縮させること」はない。『ファウスト』の塔守リェンコイスは見ることを天職としているが決して見るものを対象化するだけではない。能動的である同時に受動的に存在すること、世界と共振することで塔守は至福感に包まれる。「全体性が語られるためには、それを律する価値観や統一の様式の成立が不可欠であろう」と宇佐見は論を閉めている。それは感性の萎縮を言うあまり、「個人の独善に陥り易い」感性の個人的回復ではない。全体を見失った部分に意味がないのは、抽象化が我々の想像を越える領域まで進む時に倫理的価値が等閑視されるからである。

こうした壮大なヴィジョンを抱き、融通無礙に生きたゲーテを「楕円」の特性で捉えるのが花田清輝の『変形譚—ゲーテ』(昭和23年)である。「一方の焦点に生々流転する変形の過程があり、他方の焦点に確乎不動の種族的固定性があり、これら二つの焦点を基点として描かれる楕円こそ、ゲーテの自然科学の象徴である」というマイヤーの説を踏まえて花田はゲーテを徹頭徹尾楕円であると考え、その意味ではゲーテは印象主義者の肉眼と表現主義者の心眼を兼ね備え、植物をみると同時に自分自身をみていたと説く。収縮と拡張との間の微妙な力学的均衡を自分の内に感じている人物でない限り、必ず惨憺たる結果を招くのが常であるが、ゲーテはそうではなかった。本能、感情、欲望、衝動というエラン・ヴィタルのみならず、理知、計画、規律、訓練というフラン・ヴィタルの交替という意味で、遠心力は常に求心力を内包している筈である。ゲーテはそういった力学の中で全人的に生きたのである。中心がひとつの円よりは焦点が二つの楕円がいかに動きに向いているか、ゲーテの活きた感覚に適した形であるかは論を待たないであろう。

矛盾、屈折、転換等のゲーテ的心性は三木の学問的、亀井の感性的、片山の詩的、宇佐見の自然科学的、花田の図像的把握と並んで最後に小林秀雄の『モーツアルト』(昭和22年)はその意味では直感的勘と言えらる。ゲーテがベートーベンに言及することが少なかったのは、モーツアルトの演奏に酔ったゲーテの耳が頭に反抗した

のだ、と小林は言う。壮年期のベートーベンの音楽に、異常な自己主張の危険を感じ取ったのである。「自己主張、自己告白の特権を信じて動き出した青年達の群れ」、即ち所謂ロン主義的心性はゲーテの同情を惹くことはなかった。それに比してモーツアルトの音楽は「耳元で何かを囁いたと見る間に、それは凡そ音楽史的な意味を剥奪された巨大な音と変じ、彼(=ゲーテ)の五体に鳴り渡る」。ゲーテの奥深くにある苦い思いが「モーツアルトという或る本質的な謎と共鳴」していたと小林は確信する。同じ強度で小林は「いづれ人生だとか文学だとか絶望だとか孤独だとか、そういふ自分でもよく意味のわからぬやくざな言葉で頭を一杯にして」道頓堀をうろついている時に、「脳味噌に手術を受けた様に驚き、感動で慄へる」くらいにモーツアルトの音楽に衝撃を受ける。それが本当に鳴っていたのか、幻聴なのか定かではない。一枚のモーツアルトの肖像画の中で画家の存在などに全く意を介することのない、モーツアルトの前からは世界は消えている。ひたすら一切を耳に賭けて待つモーツアルトが描かれている。そうして生まれト短調シンフォニーは小林を、「何と沢山な悩みが、何という単純極まる形式を発見しているか」と驚嘆させるほど張りつめたものである。画家が眼中になかったように、モーツアルトの音楽は小林を「僕の思想や感情には全く無頓着に、何といふか、絶対的な新鮮性とでも言うべきもので」、驚かせたのである。この凝縮された精神の強度に太刀打ちできるものはないであろう。そこにはゲーテとモーツアルトと小林の間に動かぬ照応がある。「あらゆる解釈を排しても動かぬものだけが真」である、という小林の強い確信が感じられる。そのことは最後の文にはっきりと読み取れる。「僅かばかりのレコオドに僅かばかりのスコア、それに、決して正確な音を出したがるぬ古びた安物の蓄音機。一何を不服を言う事があろう。例えば海が黒くなり、空が茜色に染まるごとに、モーツアルトが威嚇する様に鳴るならば」。

自然、多様、直観、必然性、矛盾、陶醉、有機体、両面性、肉体的感情、照応、全人、これらが互いに関係し合い、そこに動かしがたいゲーテの世界像が浮かび上がってくる。その意味では深層に在る世界はゲーテ誕生からほぼ270年経っても変わっていない筈であるが、表層的には隔世の感があり、その事に社会も大きな疑問を抱いてはいない。自然から離れた文学・文学研究からはチャンドスの切羽詰まった言葉の問題も起こりようがない。また作者及び読者から切り離されたテキスト分析など、出汁の効いていない食べ物で、味も素っ気もない。昨今の過度の客観主義に対してはゲーテなら警告を発したであろう。個が凝縮されて普遍性へ至る道、具体が抽象を経て総合へ至る道が閉ざされ、書く者の息吹と手触り、読む者の書き手との格闘がなくなった観のある現代

こそ本物の文学の復活が望まれる。

最後にゲーテの有名な詩「旅人の夜の歌」のヴァージョンⅠ、と誰もが知るヴァージョンⅡを挙げておく。

ヴァージョンⅠ

天から来るお前よ
全ての苦悩と痛みを和らげよ、
人一倍哀れなる者を、
人一倍生気で満たせ、
嗚呼、俺はあくせくするのに疲れ、
痛みと喚起が一体何だと言うのだ？
甘き平安よ、
やって来い、嗚呼わが胸の内にやって来い！

ヴァージョンⅡ

全ての峰に
憩いあり、
全ての梢に
お前はほとんど
息吹を感じず；
小鳥達は森で黙す。
待て、やがて
お前も憩えよう。